第04章 — 風神

01 — 身をかわす男

風神は隠れていなかった。岡京でも最も古い水門の保守足場に立ち、技師たちが手動連結機構を交換するのを眺めていた。前夜の雨水は、通されるときを待つ川のような力でコンクリートを押している。

ロイは裁判所の立会人とともに来た。武器は見せていない。風神は証明書を見たあと、まだ治らない右肩の庇い方へ目を移した。

「雷神は署名した」とロイ。

「知っている」

「お前は？」

「知っていることは話す。だが先に、ハヴェルが何をするか理解しなくてはならない」

足場へ招かれたロイは、狭い機械室に立会人が入らないことを確認した。立会人はその制限を記録した。保守員は近くにいて、どちらも人目から完全に消えたわけではない。

「ハヴェルは、人間の鍛えた身体こそ、機械が決して置き換えられない役割の証だと信じる」と風神。「間違っているのは、違いがあることを、他者を壊す許可にしてしまったことだ」

「お前の間違いは？」

「彼にその証明をさせる手伝いをしたことだ」

ロイは攻撃するために待ち構えた護衛を想像していた。実際にいたのは、守ってきた相手への証言を裏切りと呼ぶべきか決められない男だった。

02 — 古い規則

風神は二人を育てた訓練について話した。身体全体を通して力を伝える技、手の鍛錬、触れている間の平衡保持、視覚ではなく接触の圧力から相手の意図を読む技法。師たちは異なる流派の名でそれらを教えた。ハヴェルは機械的な補助を一切使わずに訓練するよう求めていた。

「人間の技が時代遅れではないと証明したかったんだ」と風神。「初めは同意していた。今でも技術には意味があると思う。でも技術は法的な権利ではない」

ロイは刀について尋ねた。

「若いころから沖縄空手を学んでいた。古武術、武器術、関節法、呼吸と発勁。半分の年齢の師範よりよく覚えていることがある」

「ただの年老いた大臣だろう」

「そう見せたかったのさ」

「刀の先から力が飛ぶという話は？」

風神はためらった。「通常の斬撃の間合いの外で傷ができるのを見た。恐ろしさから話を大げさにした証人も見た。私が測ったことと、測れなかったことだけを話す」

練習用の木の棒を差し出されたロイは、すぐには受け取らなかった。

「教えるつもりなら、代償を言え」

「強い身体が勝つとは限らないと、確信を捨てることだ」

03 — 実演から闘いへ

風神は棒を押すように言った。最初は穏やかだった。ロイは全出力の一割も使わず、傷んだ肩を圧力の線から外して押した。風神は手首で力を受け、腰を回して足場を横切った。ロイの重心だけが棒を追って空間へ流れた。

角度を変えて再び押す。風神の平衡点はロイが計算し終わる前に移った。男は視界の端を滑るようだったが、足は濡れたコンクリートを離れていなかった。

「私がいた場所を見ている」と風神。「私が何を守っているかを見ろ」

突然、警告音が響いた。保守員の一人が、作業台車を斜面に残したまま運搬ブレーキを外してしまった。台車は開いた点検溝へ転がり、そこには若い作業員がかがんでいた。

ロイが止めに動いた。しかし先に達した風神は、肩と短い踏み込みで台車の進路を変えた。台車は作業員ではなく手すりに激突し、手すりを折った。二人は滑りかけた足場に残された。

ロイは風神の袖をつかんだ。年長の男は身体を返し、ロイを巻き込んだ。救助が、転落の縁で足場を奪い合う激しい攻防へ変わる。ロイの損傷した膝が固まり、視界の端に警報があふれた。

「そこから離れて！」と作業員が叫んだ。

04 — 一秒の縁

風神を手放せば、ロイ自身は安全な地面へ移れる。しかし男は点検溝へ引き込まれる。訓練された追跡者なら、それを許容損失と分類したかもしれない。ロイは修復不能な人間の命を、そのような分類で失わせる理屈を幾度も見ていた。

彼は逆に握力を強めた。

風神の手がロイの前腕の内側に触れた。小さな動きが手首を通って傷んだ肩へ伝わる。内部衝撃の警告が立ち上がり、ロイは反射的に殴り返しかけた。

「私に向けるな」と風神。「圧力を使え」

ロイは引く方向を変えた。回転する力に逆らうのをやめ、その力で二人をまだ無事な手すりへ運んだ。肩が一瞬破綻し、制限装置が必要な出力を切った。それでも左手で手すりをつかみ、速度ではなく体重を使って風神を引き上げた。

二人は歩道に転がり込んだ。台車は誰にも当たらず点検溝へ落ちた。

技師が駆け寄り、先に風神の状態を確かめた。年寄りに見えたからだろう。その無邪気な判断に、ロイは笑いそうになった。

「離すこともできただろう」と風神。

「分かっている」

「なら、今の教えは理解したのかもしれない」

「いや。誰が落ちるかを理解したんだ」

05 — 二人目の達人

事故報告書には「設備故障と救助成功」と記された。決闘とは書かれなかったが、ロイの身体は一戦を生き延びたように痛んだ。風神は接触のすべてを供述書に記した。ロイの力を利用して二人の落下方向を変えた瞬間も隠さなかった。

イマニの診断では肩に新たな損傷があったが、説明不能な内部衝撃はなかった。風神の技は精密で苛烈だが、物理的な機構でほぼ説明できる。それでもロイの驚きは小さくならなかった。

「大臣を止めたいのなら」と、病院の廊下で風神は言った。「まず刀を止めようとするな。相手の次の動作を分かったつもりになる、その確信を止めろ」

「技法には聞こえない」

「技法が通用するための条件だ」

風神はハヴェルの近距離空手を説明した。短い踏み込み、遅れて回る腰、接触する前ではなく接触したあとに吐く息。さらに古武術による間合いの操作、相手が違う攻撃を防ごうと決めた瞬間まで斬撃を保留する不気味な静止についても語った。

「年齢についての思い込みを使う。自分の筋力についての思い込みも使う。刀だけが危険だと思わせる」

06 — 別の約束を選んだ男

風神は別館に戻り、裁判所の記録官に隠し引き出しを開けた。そこには何十年も前、ハヴェルが護衛隊を作った当時の契約があった。独立審査なしに市民への致死的武力を使うことを禁じている。後の覚書は、継続性非常事態の宣言中に限り、その審査要件を削除していた。

後者にはハヴェルの署名があった。風神は受け入れ、雷神は執行した。二人とも知らなかったとは言えない。

「なぜ考えを変えたの？」とレイチェル。

「新憲章の給水所を見たからだ」と風神。「人工の女性が順番を譲り、登録のない人間の男を先に飲ませていた。誰も命じていない。人間が不要になったという証拠ではない。そんな判断に我々の分類が役に立たないという証拠だった」

レイチェルは発言をそのまま記録した。警官が引き出しを封印する。風神は鍵をすべて提出し、調査に応じると約束した。

ロイは理解した。男は一つの約束を破ることで、別の約束を守ったのだ。ハヴェルにも、まだその勇気が残っているだろうか。

07 — 去ることもできた男

聴聞室の外で雷神が風神に近づいた。二人はしばらく無言だった。風と雷という称号を、証人より象徴を好む大臣から授けられた男たち。蛍光灯の下では、ただ長く眠っていない疲れた人間に見えた。

「彼は降伏しない」と雷神。

「なら、彼が黙らせようとする人を守らなければ」

「闘う気か」

「彼と人々の間に立つ。強いて答えを求められれば、答える」

ロイには、この場を離れ、裁判所に任せるという選択肢もあった。ハヴェルには正式な権限がない。司法の手続が生き残れば、いつかは出頭させられるだろう。しかし大臣はまだ私設の保管施設を持ち、かつて国家が財産と呼んだ男に追跡者を差し向けている。遅い裁判が届く前に書類を燃やし、証人を黙らせることもできた。

問題はロイにハヴェルを逮捕できるかではない。法が意味を持てるだけの時間、証拠と人命を守れるかだった。

08 — 水の中の手紙

夕刻、北部の給水所に小さな封筒が置かれた。宛名はない。中には南部貯水池の下、閉鎖された継続性研究施設へ続く旧政府サービス通路の図面があった。

下端にはハヴェルの筆跡で四語。

お前の限界を持って来い。

もう一枚には患者識別番号の一覧。最初の患者は六年前に製造された。予定終末日が今後四十八時間以内に集中していた。

レイチェルが暫定登録簿と照合した。全員が旧行政では死亡扱いだが、実際には生きている者がいる。救急部門は二人が無許可の診療所にいると確認した。

「脅かされているのは、あなただけじゃない」

ロイは一覧を見つめた。罠であることは明らかだが、中には人がいる。彼は通路へ入る前に、独立した救助命令と民間医療班の支援を申請した。

最下段にごく薄い文字があった。

人類は、置換されたら生き残れない。

ロイは紙を証拠袋へ入れた。

「なら、生きることが競争だと思う理由を説明してもらおう」